

独創性を支える場としての分子科学研究所 —第14回日中クラスター会議に寄せて—

西原 寛 東京理科大学 特任副学長・総合研究院長



2025年10月17日から3日間、中国・廈門において第14回日中クラスター会議 (The 14th China-Japan Joint Symposium on Metal Cluster Compounds, CJSMCC) が開催された。1984年に分子科学研究所で誕生した錯体化学実験施設の初代施設長・斎藤一夫教授と、中国科学院福建物質構造研究所の卢嘉锡 (Lu Jiayi) 教授の友情から、1991年に始まったこの会議は、両国の錯体化学を支える絆として30年以上にわたり継続してきた。今回の開催地・廈門は、卢教授の生誕110年を記念して選ばれた特別な地である。

現在、日中双方ともに会議の主役は若い世代へと移行している。しかし今回は記念大会ということもあり、私は北川進 京都大学特別教授、大塩寛紀 筑波大学名誉教授とともに、初期の時代からこの会議を支えてきた立場で参加した。10月8日にノーベル化学賞の受賞が発表された直後にもかかわらず、北川博士は予定どおり

出席され、“MOF Born Flexible — Rediscovering the Softness Hidden Since 1997” と題する基調講演で会場を圧倒した。その姿に、研究者が信念をもって未知の領域を切り拓く力の尊さを改めて感じた。

北川博士の講演、そして若手研究者たちの発表を聴きながら、私はひとつの確信を新たにした。日本の錯体化学は、分子科学研究所という「自由と独創の精神を守る拠点」があったからこそ、世界に冠たる研究文化を築くことができたということである。錯体化学実験施設 (2007年、生命・錯体分子科学研究領域へ改組) は、学問の多様な芽を育む沃野として、多くの研究者に「議論する自由」「失敗する自由」「夢を語る自由」を与えてきた。

いま、世界では「成果の見える研究」「多数派の関心に沿う研究」が重視されがちである。被引用数やh-indexで評価されるからである。総合科学技術・イノベーション会議の指摘では、日本

では「スモールアイランド型研究」すなわち新たな研究の芽となる小規模独創研究の割合は減少している。しかし、科学の未来を拓くのは、孤島のように見える独立した発想である。「未知を信じる力」を守ることが、大学・研究機関の最も重要な使命であろう。

北川博士が多孔性配位高分子を発見した当時、「弱い配位結合で空孔を維持できる物質など存在しない」との批判があった、と伺った。その批判を実験と理論の両面から覆し、新しい研究領域を創出した挑戦こそが、まさに科学の進化を象徴している。独創的な研究は、最初は理解されない。だからこそ、それを育む「自由な議論の場」と「時間の許容」が不可欠である。

分子科学研究所は、その精神を脈々と受け継ぐ数少ない場所である。多様な発想と異分野の邂逅が、次の発見を生み出す。「若い研究者が“常識”に縛られず、自らの小さな島を築く勇気をもてる環境」を先導するのが分子研の真の価値であろう。

にしはら・ひろし

東京理科大学特任副学長・総合研究院長・嘱託教授、東京大学名誉教授。錯体化学を基盤に、光や電気、磁気と分子のかかわりを探る配位ナノシートなどの研究に取り組む。分子を通して新しい価値や発想を生み出すこと、そして若い世代とともに探求することを大切にしている。

